

農林水産大臣賞受賞

耕作放棄地を果樹の里山に 大学生も参画するむらづくり

しかのちょう こうちかじゅ さとやまきょうぎかい
受賞者 鹿野町河内果樹の里山協議会

とっとりししかのちょう
(鳥取県鳥取市鹿野町)

■ 地域の沿革と概要

鳥取市鹿野町は昭和 30 年^{しかの}鹿野町、^{かつたに}勝谷村、^{こわしがわ}小鷲河村の合併、平成 16 年 9 市町村の合併により鳥取市となり今の形に至る。

鹿野町の人口は 3,416 人である(令和 4 年 12 月末時点)。

面積は 52.77k m²。その内 80%が山林である。南の^{じゅうぼうやま}鷲峰山などに水源を持つ^{こうちがわ}河内川を中心に、^{すえもちがわ}末用川、^{みずたにがわ}水谷川、浜村川流域に小平地が開け、水田畑地となっています。

年間降水量は鹿野町で 2,213mm であるが、河内地区の降水量は 3,000mm を越える多雨地となっている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

河内地区は鹿野町の南部に位置し、鷲峰山と河内川により自然豊かな中山間地域である。地域の過疎化・高齢化・空き家が問題となっており、農業においても高齢化は顕著で、耕作放棄地も増加する一方にある。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

農業従事者の高齢化が進み、鳥取市において耕作放棄率は 2005 年 11.5%、2010 年 13.5%、2015 年 16.5%と年々増加している。2014 年には鹿野町河内下条地区約 4ha の農地が耕作放棄地となる可能性が明るみとなり、同時に、農地だけでなく地域全体の疲弊も心配された。集落も近い農地の

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	2 集落の集合体	
組織の特性	地域の農地を守る自主的な集団	
人口等	総人口	123人
	総世帯数	68戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数	13経営体
	個人経営体数	13経営体
	団体経営体数	0 経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	2,051ha
	耕地面積	37ha
	田	35ha
	畑	2ha
	耕地率	1.8%
	1 経営体当たり耕地面積	2.8ha

耕作放棄地化をどうにか阻止し、稲作が無理ならば新たな活用を見いだせないかと考えた。このため、地域住民有志が中心となって2015年4月「鹿野町河内果樹の里山協議会」を設立し、耕作放棄地の阻止と観光・体験農園となる果樹の里山による地域の活性化を目指した。

(2) むらづくりの推進体制

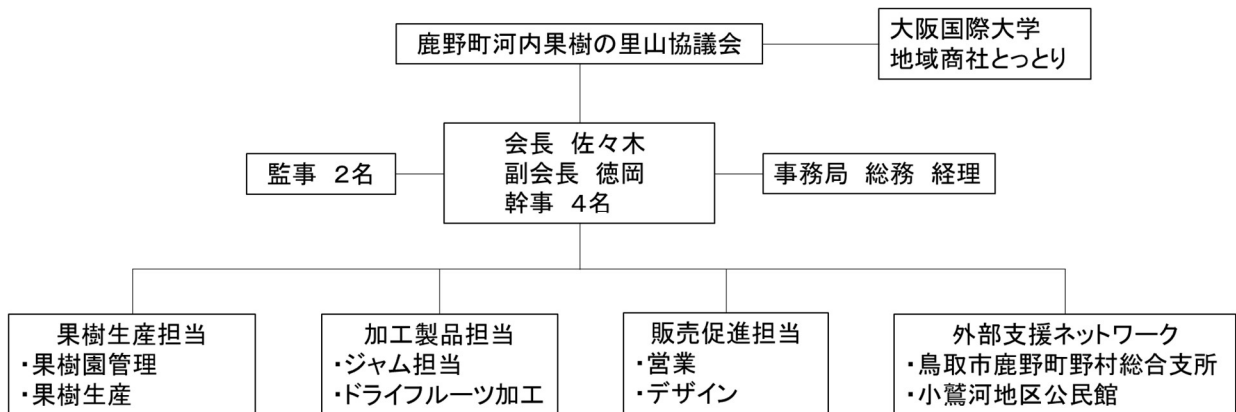
鹿野町河内果樹の里山協議会は、地域の住民、農家の有志、NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会、鳥取市鹿野町総合支所での協議を経てNPO法人理事長佐々木千代子を会長とし、2015年に設立した。この協議会の目的は、耕作放棄地を観光農園・体験農園型の「鹿野町河内果樹の里山」へと転換をすることにより、守ってきた農地を守り続けることである。



写真1 果樹の里山協議会スタート

果樹の里山を作る上ではコストや時間といった課題があったが、農水省の農村集落活性化支援事業を利用することにより、鹿野町河内果樹の里山協議会が始まることとなった。そして、現在はそれぞれの団体に加え鳥取大学、大阪国際大学の学生も継続して活動に参加し続けている。

第2表 むらづくり推進体制図



■むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 「守ってきた農地を雑草だらけにしたくない」という動機から始まる

集落の農家に、どうにかしたいという当事者意識があり、主体的に取組が始まった。

(2) 「耕作放棄地を果樹の里山に」という目的を明確に

関係機関とも対話しながら、賛同者を増やし、耕作放棄地を果樹の里山にという明確に目標が設定された。目的達成に向けた「果樹の里山プロジェクト」の取組方針に、地域の内外の多くの人々から賛同が得られた。

(3) 集落の農家だけでなく、地域の人々、地域外の人々と目的を共有

主要メンバーが鹿野町河内果樹の里山協議会を設立し、果樹の里山プロジェクト取組方針に基づいて活動を継続した。当初より、大阪国際大学、鳥取大学の学生が参加していた。目的達成するために、都市生活者の視点からもアイデアを出しながら、フィールドワークを行った。これらのアイデアを出しあって、協議会メンバーと対話して「果樹の里山ビジョン」が作成された。

若者らしい柔軟な発想で、果樹の里山プロジェクトを紹介する小冊子を作成し、PRするなどツアー企画、効果的な情報発信を行った。

また、果樹の里山プロジェクトを実行するためには、耕作放棄地の除草、果樹苗の定植作業、獣害対策など膨大な管理作業が必要であった。集落の農家だけでなく、地域の内外から多様な人々が実働部隊として参集し、地道に活動を展開した。

(4) 「果樹の里山まつり」の成功と定着

果実が収穫されるようになって、果樹の里山まつりを開催した。協議会メンバーと大学生が中心となり、立派に企画運営された。このイベント販売により、地域外からも、生産地に足を運んで消費する人の流れが定着した。収穫果実の直売、加工品販売ルートを確保し、拡販につながっている。また、交流関係人口の創出につながっている。

(5) 耕作放棄地を「果樹の里山」として再生

以上の取組により、4.5haの耕作放棄地が果樹の生産基盤に再生され、人が集う果樹の里山として生まれ変わった。永年性果樹は、植え付けてから着果するまで時間がかかる。除草を含めた管理作業を粘り強く継続し、果樹園として再生した本事例は、他の模範となるものである。

(6) むらづくりの事業として発展させ、永続をめざす

果樹の里山プロジェクトの取組成果を講演し、広報誌等へ効果的に発信した。その結果、多数の視察を受け入れ、広く知ってもらっている。

今後、収穫果実を増産して販売額の増大を目指し、新たな加工品開発や商品PRについても検討を重ねている。むらづくりの事業を発展させて永続をめざす。

2. 農業生産面における特徴

(1) 耕作放棄地を果樹園へと換える取組

2015年農村集落活性化支援事業「鹿野町河内果樹の里山プロジェクト」が採択され耕作放棄地を再生するための準備が鳥取大学生とともに進められた。

まず、耕作放棄地所有者の了解を得た上で、初年度約2haを無償で借りプロジェクトがスタートした。作業は6月から高校生と大学生とともに始められた。8月の雑草処理から始まり植栽基盤整備、畝作りへと進んでいった。そして10月29日に大学生、地域の子どもといった多くの参加者とともに初苗植えが行われた。こうしたことを通じ、地域の理解も深まり、耕作放棄地を提供してくださる農家が増えていった。そして成果としては、8年間でイチジク、栗、柿、アーモンド等11品目、860本の苗が植えられ、2020年には4.5ha

の耕作放棄地が果樹園として再生された。

この再生プログラムにおいて最も大変だった点は、雑草処理である。中には10年以上放置されていた農地も存在していた。炎天下の中、協議会のメンバーを中心に学生、地域の方々により草刈りが行われたが、なかなか厳しいものであった。これを通し、早い段階からの行動が大切だとされた。



写真2 2015年10月 果樹の里山初苗植え



写真3 大学生ツアーでの苗植え

(2) 実りを活かす取組

2016年にイチジク、2017年に栗、2018年から柿も実り始めた。地域の直販市へ2017年からイチジク、2018年から栗、野菜も出荷しほぼ完売している。

河内地区の女性を中心に2017年から商品開発を開始し、イチジクのジャムとドライフルーツの試作を行った。2018年にイチジクジャムの試作を繰り返し、レシピを決定。パッケージデザイン等も完成させ、140g入りの商品を販売開始。手作りであり多くは出来ないが2019年からは年500本~700本生産しており、予約で完売することもある人気の商品となっている。イチジクドライは2021年に、ほし芋・あんぼ柿は2022年より商品化し販売を開始。今後「すもも」「プルーン」「ベリー」などジャムの多品種化、いちじく・栗・柿のさらなる商品開発を目指している。

加工品の販売ルートを確保するため、鹿野町内4カ所、鳥取県内2カ所、関西地域4カ所、道の駅「気楽里」にも出荷し、イベント販売も好調で、関東圏への販路拡大にも取り組んでいる。



写真4 イチジクジャム



写真5 ドライイチジク

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 果樹の里山ビジョン

活動の初期から鳥取大学生と大阪国際大学生が力になってくれた。当初地域の人々は、大学生の関わりが単発で継続しないと思っていたようだが、大学生達は本気で作業に加わり、交流を深め継続的に関わってくれた事により信頼関係が生まれた。2016年1月の果樹の里山ビジョン作りでは鳥取大学生と大阪国際大学生も一緒に取り組んだ。



写真6 果樹の里山ビジョン作り 2016年1月

(2) 大学生も一緒にプロジェクトに取り組む

鳥取大学生農学部1年生が2015年春から関わり、草刈り・基盤創り・苗植えに取り組み、果樹の里山をテーマにビジョンで最優秀賞を受賞。メンバーの1人は卒業後も継続的に関わっている。

大阪国際大学生はプロジェクトスタートから関わる。毎年3～4回来訪しており、国際観光学科の久保教授指導のもとフットパスを取り入れた留学生ツアー、秋の河内里山ツアーや果樹の里山まつりの企画運営などに取り組む。また学生の提案で始まった河内地区女子会が開催さ



写真7 大阪国際大学留学生ツアー

れ新たなコミュニティーを創り出すとともに、果樹の里山景観作りとして芝桜1500本、ハナモモ120本も植えている。冊子「果樹の里山をデザインする！」PART I・II、PRビデオ製作、インスタグラム発信にも取り組み、大学校内や関西のラジオ番組等で果樹の里山を紹介。今後も大学生の得意分野を活かし交流、関係人口創出、ツアー企画、情報発信など期待されている。

(3) 果樹の里山デザイン

鳥取市鹿野町河内の地域紹介や果樹の里山の活動、商品を知って頂くためにデザインの力も必要。ホームページ、イベントチラシ、商品パッケージ、ラベル等のデザインは鹿野町出身アーティストひやまちさとさんをお願いした。活動のストーリーを大切にしたいそのデザインは可愛らしく、楽しいイメージに溢れているものであり、果樹の里山プロジェクトになくてはならないものとなっている。



写真8 リーフレット 果樹の里山ものがたり

(4) 拠点施設「里山ベース」

果樹の里山プロジェクトは活動の拠点が必要となっており、閉鎖となっていた「旧河内生活改善センター」を鳥取市と協議し借用を決定。観光農園・体験農園のおもてなし、イベント、商品開発の研究と生産、また留学生ツアーや体験ツアー、果樹の里山まつり、フットパスの拠点等、地域の人々と大学生、来訪者との交流の場になるよう活用を目指し、施設名は公募し『里山ベース』と決定した。

2020年、「鳥取市中山間地域遊休施設活用支援事業」を活用しリノベーションに取り組む。

観光農園、視察、イベントの拠点に相応しくトイレは清潔なものとし、ホールは開放的で明るくした。ピザ窯も設置し「いちじく」や地域の「やたら漬け」メニューを考案、子どもたち、視察に訪れた方々のピザ作り体験も行っており人気である。年間10日程度の使用で閉鎖施設となったが、里山ベースでは果実のパッケージ、ジャム等製作、ピザ窯を使った交流や視察、イベントなど年間約100日の使用となった。今後「里山ベース」を活用し、地域に交流と小さな経済的循環を更に創り出すことが期待される。



写真9 新しくなって活用される『里山ベース』

(5) 果樹の里山まつり

2020年10月17日、18日に初めての「果樹の里山まつり」開催。大学生も含む59名のスタッフ、ボランティアの協力もあり、里山ベースを中心に「直販市」「くだもの狩り」「ミニコンサート」に加え、大学生が企画した「フットパスツアー」「鹿野ビンゴゲーム大会」「おもさ当てクイズ」「落ち葉のフロッタージュ」「instagram写真コンテスト」はどれも人気であった。メディアにも取り上げられ予想を遥かに超え2日間で594人が集った。果樹の里山活動と河内地区の魅力を多くの方に知って頂く機会となった。



写真10 果樹の里山まつり

地域の方も「河内にこれだけの人と賑わいがもたらされたことは記憶に無い」と仰っていた。2021年はピザカフェが人気となり、2022年は9月17・24日・10月1日に鹿野城下町を中心に開催された「週末だけのまちのみせ」に連動として開催し、10月23日には大阪公立大学生、大阪国際大学生と一緒に「果樹の里山まつり」を開催した。地域の新たな賑わいイベントとして定着してきている。